

この原稿は、新曜社より 2004 年 3 月頃出版予定の『マインド・サイエンスの戦場』の中の、水本の担当した第三章「心の哲学」からの抜粋です。

第三章：心の哲学

1. 心とは何か：概念的分析

1-1 哲学 VS 心理学：現代哲学は心理学から生まれた？

1-2 心=意識：デカルトによる「心」の発明

1.3 心の印としての志向性：布伦ターノの特徴づけ

1.4 意識と志向性：心の哲学の二大問題

2. 工学的観点から

2-1. コンピュータ楽観主義と悲観主義

1) チューリング・テスト

2) 心の計算理論

3) 批判的・悲観的見解

4) コネクショニズム

2-2. 計算主義 VS コネクショニズム

1) 因果的効力

2) 内容と表象

3) 現象と表象

2-3. 反表象主義？

3. 形而上学的観点から

3-1. 自然主義

3-2. 物理主義

1) 哲学的行動主義¹

2) タイプ同一説

3) 機能主義

4) 表象主義

5) 非法則的一元論とトークン物理主義

6) 消去主義

3-3. 様々な反物理主義

3-4. クオリアと反物理主義

1) クリップキの様相論法

¹「哲学的行動主義」は、ワトソンやスキナーの心理学的行動主義と区別するためしばしばこう呼ばれる。後者は本来、「観察可能なデータ」という観点から心理学を「行動の科学」とするための、方法論的なものであった。

2) ジャクソンの知識論法

3) チャルマーズのゾンビ論法

4. 民間心理学の観点から

1) 民間心理学は「理論」か？

2) 「理論」か「シミュレーション」か？

3) 「理由」は原因か

5. 社会的観点から

前節では民間心理学について検討し、それが「誤った」理論として棄却されるべしと考えられた背景には、心が何か「内的」なものであるという前提があることを見た。だが、現代の分析哲学においては、そのような前提は、もはや必ずしも自明の話ではない。この節では、こうした心的なものが世界へと広がっているという考えに導く諸議論を概観し、心的なものの社会的性格を浮き彫りにしたい。

5-1 心は内的なものか

1) 「意味は頭の中にある」：パットナム

2) 「理解は心的過程ではない」：ウィトゲンシュタイン

3) 「理由」は外にあるのか、内にあるのか

4) スワンプマン問題

3-2 で見たように、表象主義者はクオリアさえも、機能主義的に説明しようとする。すなわち、クオリアは経験の表象内容（の質）であり、ある経験がその表象内容を持つことは、進化史によって育まれた生物学的機能なのである。だがこれは、クオリアが、それを持つ個体の種の進化史に付随する、ということであり、その前提がスワンプマン問題に直面したのであった。スワンプマンとは、デーヴィッドソンが Davidson(1987)で名づけた、沼の灌木が雷に打たれて突然出現した人間の物理的レプリカであり²、全く偶然に人間と物理的に同じとなったに過ぎない対象であるため、正当な進化史を持たず、それゆえ（目的論的機能主義に従えば）それはいかなる生物学的機能も持たない。従ってそのようなものは人間でも、それどころか生物でもない。それはまさしくこの世界に実現されたゾンビである。だがこのことはまた、著しく我々の直観に反することも認めねばならないだろう。それはスワンプマンが生じうるということがありそうもない、ということではなく、仮にスワンプマンが存在したとしたら、それが物理的には全く普通の人と変わらないのに、心的内容どころかクオリアさえ全く持たない、ということが直観に反する、ということである。目の前に、ある人と物理的には全く区別不可能なコピーがあり、その人と全く同様に話し、振舞い、実際その能力があるように見えるのに、それがゾンビであるといかにして受け入

² 目的論的機能主義批判としての偶然的レプリカという考え自体は、Boorse (1976)にすでに議論として使われており、目的論的機能主義による心的内容の理論を展開した Millikan (1984)と Papineau(1984)においても意識的に取り上げられている。

れることができようか。この直観は、クオリアや思考とは何か「内在的な」ものであるのに、それが進化史という過去の事実³に付随する、ということに対する違和感であると言える。

ところが、よく考えればこれと似たような状況は実際にある。例えば非常に精巧な二セ札は、本物の紙幣と区別するのが難しい。それどころかそれは、本物の紙幣製造機を盗んで刷られたものかもしれない。そのときその二セ札は、物理的にはもはや本物と区別不可能である。それが二セ札であるのはただ、それが不正に作られた、というその製造過程にあるにすぎない。ここでも物理的には（タイプとして）同一である二つのものが、その過去の事実の差異によって全く異なるものと見なされていると言えよう。だがもちろん、この差異は我々が単にそう「見なす」という差異であってはならない。正気な人ならば、ある紙きれが本物の紙幣であるか偽札であるかは単にそう「見なす」という我々の態度に依存する、などと言うことはできない。そうでなければ我々は恣意的に自分の好きな紙を本物と「見なす」ことによってそれを本物の紙幣することができ、社会は大混乱に陥ってしまうだろう。これを「単なる」社会的事実とし、心的表象の機能といった生物学的事実と対比して、實在性に劣る事実と見なしてはならない。むしろ、スワンプマンの議論が明らかにするのは、我々の心的事実一般が、（生物学的事実であると同時に）紙幣の事実と同様、脳内の事実を空間的にも時間的にも越えている、ということであろう。

5-2 認知科学はどのような「科学」か

第二節の最後で見た「反表象主義」は、認知を脳内のローカルな出来事とする考えに対する反抗であったと言えよう。そしてこの節で見てきた様々な議論も、心的なものは時間的にも空間的にも脳内の事実を越えて広がっていることを示している。そこではまだ（グローバルな）付随性が成立しているかもしれないが、それはもはや物理主義者の当初望んでいたものとはかけ離れているように思われる。特にクオリアさえもが脳の外の実事に依存する、ということは、物理主義の観点からは信じ難いものであろう。だが、一旦理解されれば、クオリアを始めとする意識の現象的側面、そして心的事実一般というものがいかなる意味で「存在している」と言えるのか、ということが見えてくる。つまり、それら心的事実は、法律や国家などと同様の、社会的事実の一つなのである。社会的事実は何か規約や慣習などのように、人工的に築かれたものであり、（なぜか）それゆえ本当には存在すると言えない、と考えられがちである。だが、社会的な機能に基づく事実が社会的な事実であるとするならば、何かはイスである、あるいは机である、といった事実も同様に社会的な事実である。人間のいない火星にたまたまできたイスの形の岩は、イスのゾンビであり、イスではない。そうであれば、逆に我々は、心はイスや机が存在しているというのと同じ意味で存在している、と言うことができるはずである³。

³ もちろん心の社会的性格を認めることは、心的事象が物理的、生物学的基盤を持つということを否定するわけではない。単にそれのみが心的なものを構成することはできない、

サールは、事実概念と機能概念の分析により、社会的事実を似たような仕方で説明した（Searle 1995）が、彼にとって「機能」はあくまで観察者相対的な存在であったため、彼は心的事実を社会的事実とするのではなく、社会的事実の方を心的事実の方に還元してしまい、結果としてそれは救いようもなく二元論的な捉え方となってしまった。そこでは世界は心的な事実と物理的な事実とにまず分けられ、そして心的とされたものがいかにして物理的なものに還元できるのか、あるいはできないのか、が心の哲学の問題であると見なされている。だが今やそのようなデカルト以来の枠組み自体が見直されるべきであろう。むしろ、ここでの社会的事実とは、心的事実の他にも道徳的事実、美的事実など、様々な性質について的事実を含む、多元論的なものであり、心的事実はその中の一つにすぎないものである。

世界を簡単に心的なものや物理的なものに分けられると考える背景には、他の社会的な事実が何か「規約」に基づくフィクショナルなものである、あるいは心的なものに依存するのだ、という思い込みがある。だが、規範性は心的なものに還元できないし、社会的事実には強い独立性を持つのみならず、暴動を起こしたり、ビルを建てたりといった因果的効力を持つ。そのような社会的な因果関係は、自然科学の因果では必ずしも捉えきれないものであるが、もし社会的な因果関係そのものを社会的事実と捉えることができるなら、社会的事実が存在すると言える限り、そのような（自然科学的因果を超える）因果もまた存在すると言える。そのような因果は「非科学的」な因果なのだろうか？けれども、もし心的因果がこのような因果であるならば、認知科学が科学である限りにおいて、それも科学が探究すべき因果であるだろう。いやむしろ、ここで我々は、認知科学がいかなる意味で「科学」であるのかについて大きな誤解をしていることに気付くべきである。心的事実が社会的事実であるならば、認知科学は社会科学が科学である、という意味でのみ科学であり得るのであり、そこではいかなる文脈からも独立で厳密な因果の「法則」など要求されていないのである。

ここでもう一度スワンプマンの議論を振り返ってみよう。スワンプマンが直感に反するように見えたのは、それが物理的には区別できないにもかかわらず、クオリアを持たず、それどころか生物でさえない、とされたからである。確かにもし我々がスワンプマンを目の前にしたら、それを人として扱わないでいるのは困難であろう。だがそのとき我々は、スワンプマンを、人間「として」扱うのであり、それだけでは彼が人間「である」ということは帰結しない。だがもし人間であることが社会的事実であれば、我々は積極的に彼を人間と「する」こともできる。なぜなら我々は新しい社会的事実を生み出すことができるし、実際日々生み出しているからである。すなわち、スワンプマンを目の前にして、我々は、それが人かどうかを「決断」せねばならない。現実的には、我々は今、人間から生まれたものでないものを人間とする法体系を持っていない。故に、いかに人間にそっくりであっても、法律上は彼が人間でないのは、いかにそっくりであっても二セ札が本物でない

ということである。

のと同様である。それゆえ、スワンプマンが人間となるためには、我々は「スワンプマン法案」を提出し、その可決を巡って議論せねばならないのである。実際我々は、すでにクローン人間を巡って似たような状況に立っていると言える（クローン人間は本当に人間なのか？）。

以上の考察は、素朴な心脳同一説がいかにか誤っているか、ということを示しているだろう。心が社会的存在者であるということは、それがそれを取り囲む、単なる自然的状況でなく、歴史的、文化的、政治的 etc. 状況に依存しているということである。そのことは、心の科学が社会学や歴史学、人類学などと有機的に結びついていなければならないことを示しているであろう。だがそれはまた、心の存在が、将来の我々の生活形式のラディカルな変化と共に、消滅する可能性をむしろ認めることになるかもしれない。しかしもしそうであるとしても、それは少なくとも消去主義がしばしば示唆するような現在の我々の心についての反实在論をも含意することはない。社会的存在者であっても、まさにそれゆえに、心は現在の我々の社会の中に埋め込まれており、その实在性は否定できない。そしてこのことはむしろ、消去主義の抱く「心」概念の自然科学的偏向を暴露するものであると言える。そこにあるのは、自然科学によって説明できないようなものは、政治的、法的、道徳的事実も含め、全て非實在的であるという、明らかに無理のある前提である。「国家」が非實在的であると信じていようといまいと、自然科学者であろうとあるまいと、我々は税金を払わねばならないし、法律を守らねば罰せられる。それどころか脳死や中絶を巡る議論が示すように、我々の「生命」概念も実際に社会的なものなのである。

社会的次元の自律性を認めることは、あたかも非科学的なロマンティシズムのようにしばしば受け取られてきた。だが、そのような見方こそが誤っていたということが、今まさに（単に哲学的にでなく）「科学的に」理解されねばならないのではないだろうか。

6. まとめ：心の科学における哲学の地位

- 1) 概念分析の意義
- 2) 批判的活動としての哲学：概念警察官？
- 3) 創造的活動としての哲学：新たな概念的空間の探究